

びんちよくごろく 敏直語録

No. 8

作曲作品ではなく、「佐藤敏直の文章のファンだった」という人は意外に多い。

先生の言葉には不思議な魅力がある。どの文章からも、厳しさと強さを支える深い優しさをみるように思う。ファンだったという誰もが、先生のそのとてつもない優しさに触れたくて、文章を何度も読んで心に言葉をそっと置いて、大切にしまっているに違いない。

敏直語録では、佐藤敏直の「ことば」のきれはしや、鋭い「独り言」、また「散文」や「随筆」、音楽や教育への提言、編集長として毎月書かれていた「編集後記」等々、毎号少しずつ紹介いたします。

今回は、1988年12月に催された「専修大学グリークラブ第24回定期演奏会」のプログラムに寄稿された文章を取り上げてみました。

『高村光太郎・草野心平 そして私』

私の手元に一冊の赤い表紙の詩集がある。赤い表紙と言ってもそれは赤い色のラシャ紙であり、詩集と言っても、中の文字は全部ガリ版による手書きの騰窺版印刷で、ザラ紙の袋とびである。

奥付には「1962年4月2日発行・著者高村光太郎・鐵筆草野心平・250部限定・定価四〇〇円・発行所歷程社」などと記されている。

「猛獣篇」と書かれた表紙の大きな筆文字と、中の詩文は、すべて草野心平氏が書いたもので、これが猛獣篇全15篇をまとめた初版本であった。

実はこの貴重な詩集は私のものではない。私の妹で、諸君のグリークラブの部長である鶴田教授夫人が貸してくれたものである。

高村光太郎の「智恵子抄」などを読むと、詩人の心なのか彫刻家の眼なのか、それとも夫婦愛なのか私にはその世界があまりにも想像を超えていて俄かに感動し難いけれど、この猛獣篇は素直に読める。

光太郎の七周忌の霊前に花束代りに捧げたいと、小学校の低い子供机でガリ切りをした草野心平は、光太郎の高弟であり、私の好きな詩人である。事実私は「窓」「ベーリング・ファンタジー」「日本海」などを歌曲に作曲したり、合唱のためにも幾つか書いた。

その草野心平筆跡によるこの詩集に接したことの驚きと喜びも手伝って、以前あまり気づかなかった光太郎の凄さのようなものを改めて観ることが出来た。

猛獣篇は、大正の末から昭和初頭にかけて書かれたが、その後しばらく中断して昭和12・13年頃にまた再開されている。光太郎ですら動物を備りて物言わねばならなかった時代、というべきか。

私は依頼を受けて今回四つの詩を選んだ。

そのどれにもある、逞しさや、皮肉と怒り、哄笑、そして悲しみは、今に生きる私にも充分通ずるものだ。一見平和で物の豊かなこの時代にこの詩を通じて一音楽人としてのある発言を試みようと思ったのが作曲の動機となった。

若い学生諸君の柔かな顔はこれらの響きをどう抱えてくれるだろうか、楽しみである。

そしてまた、指導して下さった岡本仁先生が私と同年生れ、というのも、内心秘かに初演の聴きどころだと思っ

(専修大学グリークラブ第24回定期演奏会プログラム より)

